

トーマス・マンとヘブライズム

——「関心」の展開としての『ヨセフとその兄弟たち』——

西 江 秀 三

[は じ め に]

トーマス・マンは『ヨセフとその兄弟たち』（以下『ヨセフ』と略記）執筆の動機としていくつかの要因をあげている。¹⁾ の中にはかつてゲーテが『旧約聖書』のヨセフ物語についていった言葉、この物語は愛すべきものだが、ただあまりに短いという言葉がある。この言葉は、マン自身が聖書を繙きこの物語に魅了されたという経験と反響しあっている。その反響を引き起こしているのは、マンの物語への本能的な指向性を非人称性という名のもとに客体化した、いわゆる「物語の精神」である。そして、マンはこのゲーテの言葉が、マンのなかにある「物語の精神」を喚起し、『ヨセフ』創作に向かわせたのだという。

時代的な要因もある。ナチスの対ユダヤ人政策に対する反措定、すなわちユダヤ人小説としての『ヨセフ』である。マンはこの要因を肯定する。しかし、それはまたこの小説の前景にしか過ぎないともいう。

そしてさらに、おそらくは作家としてのマンにとってもっとも大きな要因がある。いわゆる〈個人的・市民的なもの〉から〈典型的・神話的なもの〉への転回である。マンはこの転回を作家としての個人的な変容にとどめず、人間に生起する根源的な変容体験として捉えている。そしてマンは、このような下地があったからこそ、ヨセフ物語に対する眼が開かれたのだ

という。たしかにこの世界観の転回がなければ少なくとも現行のような『ヨセフ』は書かれなかったことだろう。マンはこの小説のなかで、みずから手にした〈典型的・神話的〉な世界観を思う存分展開させることによって、物語そのものの懐にどっぷりと浸かっているからである。

しかしこれだけではまだ、『ヨセフ』に到るトーマス・マンの歩みに納得がいくわけではない。マン自身が小説のなかでは前景にすぎないといったヘブライ的なものは、かならずしもこの小説の装飾的なものではなく、前景というよりむしろ後景、あるいはさらに作品そのものを産み出した背景ということとはできないだろうか。といってもそれは、マンが直接ヘブライ的なものから影響を受けたということではなく、作家としてのマンの歩みのいくつかの局面で、ヘブライ・ユダヤ思想と共通の世界観が現われるという意味である。この論考はその一つの局面を辿る試みである。

〔関心の様相〕

初期の短編『道化者 (Der Bajazzo)』のなかで主人公は小説の始めと終わり頃に同じ言葉をつぶやいている。「無関心 (Gleichgültigkeit) は、僕は知ってるんだが、一種の幸福といえるだろうよ。」²⁾ という言葉を。関心を持つと、対象に対して好奇心を持つと、破滅が訪れるからである。これはトーマス・マンの比較的短い小説に頻繁に現われるテーマである。『小男フリーデマン氏』は、自分で作りだしたささやかな幸福のなかで充足していたが、一人の女性に関心を持ったために、いや持たされたがために、破滅する。『トニオ・クレーガー』では、北方のどんよりとした鈍色の光に照らされながら、『ヴェニスに死す』では、南方の暑苦しく重い光りに照らされながら、このテーマが展開される。前者は、幸福で愛すべき平凡な人々に寄せる愛、そのなかに憧れと憂鬱な嫉みとわずかな軽蔑と清らかな心からの幸福感が含まれた愛の告白で終わり、後者はひとりの美少年に対する

とめどもない関心に全身を浸されながら、海辺で死んでいく主人公の姿で終わる。表面的には前者は幕間劇の趣を持ち、後者は悲喜劇と名付けることができるだろう。しかし、本質的にはこの一対とも呼べる二つの中篇は、同じテーマをめぐっている。「関心」はトーマス・マンにとっていわば宿命的な主題である。だからこそ彼は、自分の体内に蓄積した熱を一度に解放つかのように内面を演じた作品『非政治的人間の考察』で、つぎのように言い切ったのである。

「〈愛〉の知的な名称は〈関心 (Interesse)〉である。そして、関心がけっして生気のない感情ではなく、——むしろ激しさにおいては、たとえば賛嘆 (Bewunderung) の感情を大きく凌駕することを知らない者は、人間の心理を読むことができないのだ。」³⁾

この言葉は、ニーチェのワグナー批判との関連で書かれたものだが、マンは〈賛嘆〉が対象をそのまま肯定するのに対し、〈関心〉が対象の批判、場合によれば誹謗という形をとるといい、ニーチェのワグナー批判が、対象に対する大いなる関心＝愛にその根拠を持っているとする。それは、ニーチェの批判によってワグナーに対する愛がますます深まったというマン自身の体験によって裏打ちされる。

賛嘆は対象を固定し、関心はそれを揺り動かす。その意味では、関心はいわば対象からの、そして対象への試みである。そして、対象からのあるいは対象への試みという精神の動きは、対象と自己との違和感によって惹起される。対象と自己とが調和状態にあれば、関心のでる幕はない。また、いわゆる形式と内容の一致という状況のなかでは、関心が入り込む余地がない。関心は対象と自己が、自然と精神が、そして形式と内容が分離したところでその姿を現わす。そして関心を抱く主体は対象に引き寄せられながら、対象から疎外されているという感情を抱く。その意味で、関心とは常に負いの感情なのである。愛という美しい言葉を身にまとうにしても、関

心は癒しがたい渴きであり、嫉みなのだ。先にあげたマンの短編の主人公たちは、試みのなかで、誘惑のなかで破滅する。たとえ破滅を免れることがあっても、彼らが〈関心〉の圏内に住まう以上、彼らは繰り返し試みられる。

この繰り返しの試みは、ヤハウェがヘブライ人に幾度となく実行したものであった。アブラハムが、イサクが試みられる。ヤコブもヨセフもそれぞれに試みられる。いや彼らだけではない、ユダヤの唯一神を信じるものはすべて試みられることになる。なぜならヤハウェはまず第一に嫉みの神なのだから。そして嫉みというものは、いうまでもなく、相手の存在の肯定、相手に対する信頼においてではなく、相手への関心のなかで生じる。相対峙する存在の間で関心は動きだす。関心は寄る辺なき感情である。だからこそ関心が行き交う間で試みが終わることはない。絶対神であるヤハウェはエジプト人に自分の力を見せつけるために、何度もパロの心をかたくなにする。川を血に変え、魚を死なせ、エジプト全土を、蛙で、蚋で、虻で、疫病で、膿のでる腫れ物で、雹で、そして最後には蝗でおおい、さらに出国のとき、エジプト人とその家畜の初子をすべて殺し、イスラエル人にエジプト人のものを盗らせ、追ってきたエジプト軍を全滅させる。⁴⁾ これはすべてエジプト人に、そしてひいてはイスラエル人に自分の絶対的な力を顕示するためということになっている。しかしこれは愛の、したがって関心の一形式なのである。子供が他人の関心を自分に引きつけるために、思いもよらぬ、そして時には残酷な悪戯をするように、ヤハウェはエジプト人に、そして彼の民イスラエル人に、自分への関心を、畳み掛けるように強要する。ヤハウェが関心をもち、自分の意志の試金石にして実現者と定めた者は、ヤハウェに関心を抱き続けなければならない。それを怠ると神の怒りを招く。しかしヤハウェがどれほど、イスラエル人に関心を示しても、この神は彼らから隔絶している。彼らが、ヤハウェに帰依し、愛と

関心を注ごうとも、彼らはやはり、神から疎外されている。そして同時に、目に見えぬ神から選別され、神からの関心を享受するただ一つの民族は、その他の世界から疎外されている。彼らは特別な関心をもつ人々だから。

たしかに関心は生気にあふれる感情といえる。しかしそれはまた自己蚕食する感情でもある。冒頭にあげた『道化者』は、自分の幸福に対する信頼を失い、彼が強い関心を抱く女性とその話し相手のいかにも正道を歩んでいるように見える紳士が作りだす生の世界から疎外され、つぎのように叫ぶ。

「わたしはこの下に座り、この離れた暗いところから、あの大切な、手の届かない女性がこんなくだらない奴とお喋りしたり笑ったりするのを、不機嫌に観察するというざまなのだ！ 閉め出され、歯牙にもかけられず、なんの権利もなく、よそ者で、正道から外れ、零落し、パーリアで、私から見ても哀れな様子で……」⁵⁾

関心を持つことによって、彼は自分の有様を突き付けられ、自分に対する不信と嫌悪にさいなまれる。彼は自分を疎外された者、正当ではない者、パーリアと呼ぶ。

パーリアとは、インドの最下層民のことだが、なによりもまず、ユダヤ人との関連で使われる言葉である。マックス・ウェーバーは、『古代ユダヤ教』の冒頭で、インドのカスト制度と関連づけながら、社会学的に見てユダヤ人とは何だったかという問いを立てる。パーリア民族であったというのがその答えであり、ウェーバーのこの浩瀚な書物は、パーリア民族としてのユダヤ人の解明に終始一貫している。そして、ウェーバーによってこの言葉は、単に社会的な下層民を現わすのではなく、局外者という象徴的な意味を帯びることになる。⁶⁾ ユダヤ人は民族⁷⁾として、集団組織として、それもほとんどが各地に離散したディアスポラとして、局外者であった。そこにその独自性がある。

そしてまた、局外者意識は、トーマス・マンの多くの作品の基調音である。『トニオ・クレーガー』には、インドに発祥するといわれる放浪の民ジブシーが、「緑色の馬車に乗ったジブシー」という言葉で、トニオの精神の象徴として現われる。いうまでもなく世界に散在するこの民族も、ユダヤの民に勝るとも劣らぬ局外者である。そして、トニオにおける、局外者であることの自負と呪いは、神から選ばれたユダヤ人の自負と、「この世においてユダヤ人であること以上に悲しむべきことはない」⁸⁾ という言葉に現われたユダヤ人であることの苦痛と照応する。違いは、トニオの場合には個人的な姿勢の問題であり、ユダヤ人の場合には民族全体の問題で、個人の姿勢そのものはほとんど意味を持っていないということである。⁹⁾ それは極めて大きな違いではあるが、局外者という意味を社会的なものから精神的なものに移し置けば、両者の類似は否定できないだろう。どちらも、「関心」によって育まれ、「関心」によって苛まれる。

「関心」は、マンにとって宿命的な主題であると共に、普遍的な主題である。それは、シラーのいわゆる情感詩人の、すなわち近代の問題である。「関心」を持つ人間は、自分が道を踏み外した人間であることを意識し、それに対する負い目を持つが、同時に、分裂を知らぬ精神、本来ならば知っていなければならないはずだがその自己認識を欠く精神、「関心」をただただ肯定的に捉えその毒を知らない精神、「関心」を持つ人間から見れば、余りにも楽天的な精神に対して苛立ちを覚える。その苛立ちは、「関心」の毒に苦しむ自身に対する苛立ちでもある。そのような状況のなかで、トーマス・マンの『非政治的人間の考察』は生まれた。この書は「関心」の栄光を讃えた書であり、その意味では、マンの居直りである。しかし、この居直りのなかで、徐々に新たな転回が準備される。マン自身の、少々いかがわしいとも受け取れる言葉：

「心を煩わせる必要のないこと、関係のないことなら、これほど気につけ

ることはないものだ。なぜなら、それについてなにも知らぬわけだし、自分自身のなか、自分の血のなかにはそれが存在しないからだ。ドイツは自国の城壁内に敵を、すなわち世界デモクラシーの同盟者や支援者を持っていると私は言った。それがさらに狭いところで繰り返されるなんてことがあるのだろうか。そしてドイツの〈進歩〉を促進する諸要因を、私が自分自身の保守的内面で育んでいるなんてことがあるのだろうか。それはこういうことなのだろうか。私の存在と——それが問題になりうるかぎりにおいて——私の活動が、私の思想や意見と正確に一致するなどありえない話であり、そもそも私自身が、私の存在の一部において、この本のなかで〈デモクラシー〉というかなり場当たりのな名前で呼ばれているもの（そして選挙権の平等とはただ表面的にしか関わりを持たないもの）へとドイツの進歩を促すよう定められていたし、現在も定められているということなのだろうか。」¹⁰⁾

この発言は『考察』でトーマス・マンが繰り返し展開している思想、ドイツ精神の称揚とフランス的な理性に対する徹底的な批判を読んだあとでは奇異にひびくだろう。この発言を含む序文は『考察』で最後に書かれたものだが、ここには「関心」の転回の萌芽がある。「関心」をその閉塞的な状況から救い出そうとする、マンのせっぱ詰まったともいえる意志、あるいは作意がある。たとえそれが、一時的に「関心」を水割りし、その毒性を薄めることになろうとも、『考察』で擁護したドイツ的なものを自分の体内に持続していくためには、「関心」の否定性を「賛嘆」の肯定性で照らさだそうという作意が。「関心」の否定性は対象に向かうだけではなく、自分自身に向かい、それを抱くものを窒息させる。それをいわば本能的に回避する手段としての「賛嘆」へのためらいがちな志向、すなわちここでは進歩、自由、平等という政治性への歩み寄り、これがマンの目論見だったのだろう。マンは、同じ序文のなかで、時代によって脅かされた芸術家精神

の検討なしには、「芸術家精神の活動、仕上げ、朗らかな実現、以後のすべての行為や創作が不可能事と思われた」¹¹⁾ と言っている。芸術家精神、「関心」によって育まれたこの精神の「朗らかな実現 (heitere Erfüllung)」は、『魔の山』におけるハンス・カストルプの、「関心」の領域からの脱出を助走とし、『ヨセフ』のなかで、我々の前に姿を現わす。

「関心の展開」

トーマス・マンは1925年2月4日付けのベルトラム宛の手紙で、地中海旅行について触れ、エジプト訪問をその主要目的としている理由として、「この旅行は、私が密かに育んでいる、まだ幾分漠然としているにせよ、すでに決まった計画にとって有益だろうと思います。」と書いている。¹²⁾ 主眼はエジプトにあった、とまず言ってしまうていいだろう。ユダヤの民の一神教に対する、土俗的な多神教の世界、死者礼拝の国であると同時に、アブラハムの時代からユダヤの民と深い関係があったエジプトに。¹³⁾

この長大な『ヨセフとその兄弟たち』の第1巻『ヤコブ物語』そしてまた第2巻『若きヨセフ』はトーマス・マンの精神史においては、あるいは「関心」の展開という視点から見れば、いわば前史に属し、初期の作品に現われた世界を引きずっている。とくにヤコブという族長的性格と、神を想い、世界を神に関わる人間や事物で読み解こうとするいわば詩人的な特徴を持った人物の場合とくにそうである。ヤコブは合理的、实际的というには程遠く、極めて夢想的でありながら、異教的なものには固く身を閉ざす。それは物語の冒頭で、月に裸身をさらし、月と異教的に語り合い、亡我状態に陥っているヨセフに向かい、断固とした調子で、「裸をかくしなさい」と言った箇所典型的に現われている。彼はいわば、神と精神的に交わるという意味で、イスラエル、すなわち神に選別された人間であり、肉体的なもの・性的なもの・地下的なものはタブーなのである。彼は神へのそし

て神からの関心のなかで生きている。そしてその関係は、やはり閉ざされた関係である。その思想、その行為は、たしかに個人的なものというより典型的な一つの神話的図式であり、だからこそ、彼は母との共謀でエサウの長子権を奪い、それが兄と弟という関係のなかでの弟の選抜という神話的図式のまねびであることを意識するのだが、同時に彼は、その神話的図式を楽々と生きるには、「関心」に捕われた人間でありすぎる。彼は、ヨセフに比べ、はるかに動揺しやすい人間、「関心」に必然的に伴う猜疑を背負った人間である。ヤコブは、マンの思想的展開にとってかならずしも重要な人物ではない。『ヤコブ物語』は、マンが、個人的なもの・市民的ものの範疇で、自家菜籠中のものとして描き出せる物語であり、たとえ物語という観点からは優れたものであるにせよ、「関心」を展開していく新たな場所ではないといえるだろう。

『若きヨセフ』も本質的には、創世紀の物語を敷衍し彫琢したもので、小説の結構そのものにとくに独創があるわけではなく、たとえば、ヨセフがヤコブよりも明朗で交際好きの開けた人間であり、ヤコブが忌み嫌う土俗の神に対しても、幾分用心しながらも好奇にあふれた視線を送る人物であるにせよ、この書のなかのヨセフは、ヤハウェに選ばれ祝福を受けるべき人間という一種の閉鎖性のなかにいる。この閉鎖性は、マンが『考察』で入り込んでしまった「有害で危険なガレー船苦役」¹⁴⁾に通じており、ヨセフが兄弟たちに、母ラケルから受け継いだヴェールを引き裂かれ、穴のなかに投げ込まれることによって、負の閉鎖性として実現する。それは、引き裂かれたのが身体ではなく、ヴェールであっても、死と同等の意味をもつ事件といえるだろう。そして、ちょうどこの疑似的な死が、ヨセフの再生にとって必然的な道行きであったように、時代の流れに逆らって古きドイツ的価値をほとんど闇雲に擁護したマンは、自分のなかにある憑き物をやはり疑似的な死といえる体験のなかで一度ふるい落としたのである。その後、

マンは周知のように、現実的な政治に対する発言をひんぱんに行なうようになり、ワイマール共和国を擁護し、戦闘的ヒューマニズムという標語に象徴されるような平和の闘士になる。それはいずれにせよ政治的な問題だが、その変化に対応するように、一度穴のなかで死んだヨセフはエジプトで再生する。

第3巻『エジプトのヨセフ』にいたり、ヨセフの「関心」は新たな展開のなかに置かれ始める。ヨセフが奴隷として売られていったポティファル、このファラオの右側の私子持者でありファラオの友であるやんごとなき廷臣の館で、ヨセフは再び試練に出会う。「関心」のもっとも先鋭化した感情、禁断の満たされぬ愛の対象にヨセフが選抜されるのである。同時に、ヨセフに激しい想いを寄せる、ポティファルの妻は、エジプトの民間信仰に根ざした神、アムン神の巫女であり、宗教的な意味でも、ヨセフは試みられることとなる。そしてこの試みは、ヨセフの第2の生まれ変わりを準備するが、ここでの疑似的な死は第2巻ほどの迫真性をもたない。なぜなら、ヨセフはポティファル、兄妹である両親の結婚から生まれ、幼くして光の神アトーンに仕える光の廷臣たるべく、生殖機能を両親によって剝奪されたこの実権のない装飾的な人物に「共感」していたからである。そのなかでは、ヨセフの「関心」は、所在のない不安定な感情ではなく、エジプトという風土のなかで、唯一神ヤハウェに代わる、光の神アトーンの息吹に触れ、また、異国の風土に適応していくその過程で、より実践的な家政に集中していくことによって、とめどもなく漂うことがなくなっていた。したがって、ポティファルの妻ムト＝エム＝エネトに対するヨセフの「関心」は、危なっかしい不安定なものではなく、女主人と家僕という秩序のなかでの共感であった。ヨセフが牢獄に入ったのは、その「関心」を共感のなかで受け取り、ムト＝エム＝エネトの苛立ちと怒りを引き起こしたからであり、ヨセフの「関心」の思い上がりからではなかった。ヨセフは牢獄で数年を

過ごすが、それは鎖につながれたつらい日々ではなく、「関心」の新たな展開の準備期間といえる。

第4巻『養う人ヨセフ』にいたり、「関心」は新たな段階にはいる。ヨセフはファラオの見た夢を解くために急遽牢獄から召し出される。夢解きを終わり、多感で宗教的な想いに捕われたこの若きファラオは、ヨセフによってさらに、自らの宗教改革の根拠を示唆される。それはこの世界の外にあり、この世界を統括する至高の神という思想、ヨセフが属するヘブライの民の思想と通底する思想であり、呼び名からしてエジプト的改変は受けているが、ヨセフが幼いときから相互的な関心の投与という関係のなかで育んできたその神である。トーマス・マンはこの若きファラオを歴史上のアメンホテップ四世とする。アメンホテップ四世は、太陽神を新しく象徴化する端緒を開いたアメンホテップ三世のあとを受け、始めて真の一神教を創出したファラオとしてエジプト新王朝時代に名高いファラオだが、彼のもとでは、民衆にとっての慰めの希望であるオシリスも、そしてさらに神々という複数形さえも消えてしまう。¹⁵⁾ しかし、その死後、すぐにアムン神が神々の王に復帰し、この歴史的な一神教の導入も歴史の花火のように消えてしまう。しかし、ヨセフはマンの設定によって、この歴史上稀な時期にエジプトに来たことになり、ファラオによるヨセフの過度とも思われる重用も不自然とは思われないという効用を生む。

ともあれ、このファラオと出会い、実質的なエジプトの支配者となったヨセフはその「関心」を現実の生活に向けることによって、現実の生活からしかと支えられることになる。それはやがて、父ヤコブやその兄弟たちをエジプトに呼び寄せたとき、ヤコブがヨセフに言った次の言葉によって、別の角度から確かめられる。

「この世のことについてはおまえは長子であり、異邦人にとって、また父や兄弟にとっては恩人だ。しかし救いがおまえを通して国の民人に伝えら

れることはないし、おまえが指導者となることも禁じられている。』¹⁶⁾

この言葉から我々は二つのことを導きだすことができるだろう。ひとつはヤコブに象徴される、家父長制の存続が、アブラハム以降のユダヤの民の根幹であったし、ヤコブに祝福されたユダを通じてこれからも存続していくであろうこと、そしてやがては予言者たちがユダヤ民族の象徴となり、その閉鎖されがちな世界を他の世界に向かって開いていくであろうこと、¹⁷⁾ そしてふたつめは、これは最後の予言者の登場と関連するが、イスラエルの世界での祝福を受け取り伝える者という役割から外れたヨセフが、ユダヤ民族という出自はそのままに、異郷の地でその地の人々や異邦の人々に交じり、彼らの地上の指導者として、天と地とから祝福されていることであり、その祝福のなかで「関心」のまなざしは、広大に拡がった世界に注がれ、もはや、自分自身を蚕食するものではなく、逆に養うものであるだろう。

[お わ り に]

しかし歴史的なユダヤ人は、これ以降エジプト脱出を経て苦難の時代を歩むことになる。やがてダビデやソロモンによってユダヤ人の統一王国が作られ一時的な繁栄を見るものの、ローマ帝国によるエルサレム陥落後、ユダヤの民はディアスポラとしての運命を2000年近くにわたって余儀なくされ、『ファウストゥス博士』が書かれるその背後で起こる戦争によって、600万人余りともいわれるユダヤ人が殺戮される。シオニズム運動によって、イスラエルという現実の母国は誕生するが、パレスチナ問題のなかで平和的な建国の意義そのものが揺動し、「ユダヤ人の存在は、自分たちが入ってきた歴史的な周囲の世界のなかでどう見えたか、ユダヤ人の生活はアラブ人を除いて、あるいはアラブ人とともに、あるいはアラブ人と対抗して、どうやったら堅固な基礎のうえに築けたのか?」¹⁸⁾ という問題が生

まれる。そしてまた、たとえ祖国が再び出来上がったとしても、ユダヤ人はすでに全世界に住みついており、ディアスポラとしての運命から解放されたわけではない。

トーマス・マンにはとくにユダヤ人問題を正面から取り上げた論考はない。マンの場合にはユダヤ人問題は、ヨーロッパ人の、ひいては人類の問題のなかに吸収されてしまう。しかし、マンの芸術家精神のなかには「関心」という問題を通じて、ユダヤの思惟に共通する姿勢がある。『ヨセフ』ではその「関心」の問題は、「共感」という汎人類的な志向によって、その落ち着く場所を得る。ユダヤ特有の問題は、よりおおらかなパースペクティブのなかに溶け込み、それ自体として取り上げられることはなかった。しかし、ユダヤ的な問題は「関心」という衣装を付けて、やがてもう一度正面から取り上げられることになる。それは、もうヨセフのように天上と冥府から祝福された朗らかな肯定のなかを歩む人物像ではなく、創作のために悪魔と契約した音楽家の姿として、陰鬱な否定性の具像となって現われる。

註

トーマス・マンからの引用は次の全集による。引用の際にはGWと略す。

Thomas Mann: Gesammelte Werke in 13 Bänden. Frankfurt a.M. (S. Fischer Verlag) 1974

- 1) GW XI S. 654-656
- 2) GW VIII S. 106 & S. 138
- 3) GW XII S. 75
- 4) 旧約聖書『出エジプト記』7～14
- 5) GW VIII S. 133-134
- 6) Max Weber: Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie III. Das antike Judentum. Tübingen (J.C.B. Mohr) 1921. S. 2-5
- 7) 形態人類学的に言って、ユダヤ人がひとつの民族とはいえないのは無論の

ことだが、ここでは、ひとつの同じ宗教を奉じる人々からなる集団という意味でこの言葉を使っている。

- 8) 大澤武男：ユダヤ人とドイツ（講談社）1991. P. 247
- 9) ユダヤ人のパリアの状況に対する見方には、ユダヤ人自身が閉鎖的社会を作ったという意見と、キリスト教社会を中心とした外部の勢力がユダヤ人を隔離したためとする意見がある。無論歴史的には、後者の意見の方が適切だが、前者の閉鎖性のなかに民族として選別されたという意識があるのもまたたしかだろう。
- 10) GW XII S. 40
- 11) GW XII S. 12
- 12) Hans Bürgin und Hans-Otto Mayer : Thomas Mann. Eine Chronik seines Lebens. Frankfurt a.M. (Fischer) 1974. S. 78
- 13) 参照) ビエール・モンテ（波木居純一訳）：エジプトと聖書（みすず書房）1982. P. 3
- 14) GW XII S. 40
- 15) ジャケッタ・ホークス（小西正捷他訳）：古代文明史 2 インダス・エジプトの生活（みすず書房）1980. S. 179-180
- 16) GW V S. 1745
- 17) Max Weber : Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie III. Das antike Judentum. Tübingen (J.C.B. Mohr) 1921. S. 293-314
- 18) Vgl.G. ショーレム（岡部仁訳）：ベルリンからエルサレムへ（法政大学出版局）1991. 解説

Thomas Mann und Hebraismus

—— „Joseph und seine Brüder“ als eine Entwicklung des „Interesses“ ——

Hidemi NISHIE

In den frühen Werken Thomas Manns treten Hauptfiguren auf, die von irgendeinem Objekt bzw. meistens von einer Frau angezogen und ihr entgegen zugrunde gerichtet werden. Mit anderen Worten führt das „Interesse“, das sie notwendigerweise hegen, zu diesem Schluß. Ein Blick des Interesses reißt sie von ihrer stillen, geschlossenen und si-

cheren Welt ab und stürzt sie in den Abgrund. Das Problem des Interesses ist ein Grundthema Thomas Manns. Um dieses Thema kreisen seine meisten Werke. In den „Betrachtungen eines Unpolitischen“ betont er im Vergleich mit der „Bewunderung“ die Bedeutung des Interesses:

„Der intellektuelle Name für >Liebe< lautet >Interesse<, und der ist kein Psycholog, der nicht weiß, daß Interesse einen nichts weniger als matten Affekt bedeutet, — vielmehr einen, der zum Beispiel den der >Bewunderung< an Heftigkeit weit übertrifft“.

Im Zusammenhang mit der Kritik Nietzsches an Wagner äußert er diese Meinung. Nach Thomas Mann ist das „Interesse“ so charakterisiert, daß es sich manchmal als Kritik, ja sogar als Verleumdung zeigt, während die „Bewunderung“ den Gegenstand nur lobt und bejaht. Man kann vielleicht auch sagen, daß das „Interesse“ erschüttert und die „Bewunderung“ festigt. Im Bereich des Interesses wird man auf verschiedene Weise versucht, wie die Juden in ihrer Beziehung mit dem einzigen Gott Jahwe mehrmals versucht wurden. Das „Interesse“ wohnt in dieser Sphäre der Beziehung. Es ist eigentlich ein Relativitätsbegriff. Thomas Mann betont jedoch diesen Begriff so sehr, daß er sich ganz selbständig und absolut bewegt. In den „Betrachtungen eines Unpolitischen“ gerät das „Interesse“, das sich als Deutsches verkleidet, in die Sackgasse und erstickt beinahe.

Aus dieser Erstickungsgefahr wird das „Interesse“ durch „Joseph und seine Brüder“ stufenweise befreit. Im ersten und zweiten Band dieses umfangreichen Romans hat das Interesse immer noch fast dieselbe Eigentümlichkeit, wie sie es in den frühen Werken Thomas Manns hat. Jakob befindet sich im durch Interesse charakterisierten Verhältnis zu Gott. Ihn wählt Jahwe aus und ihn bevorzugt er. Dafür muß der Ausgewählte Jahwe immer zur Verfügung stehen und darf keinen anderen Gott verehren. Dieser geschlossenen Beziehungswelt gehört Jakob konsequent, während sein Sohn nicht unbedingt innerhalb dieser Welt wohnt. Im Vergleich mit seinem tiefsinnigen, introvertierten Vater verhält sich Joseph der fremden Welt gegenüber offener und

geselliger.

Im dritten Band „Joseph in Ägypten“ beginnt das „Interesse“ sich mit der fremden Welt in engeren Beziehungen zu stellen, und der Gegenstand des Interesses erweitert sich. Im letzten Band „Joseph, der Ernährer“ betätigt sich das „Interesse“ weniger als das Interesse an der inneren, geistigen Welt, wie als das an der Außenwelt, bzw. der Welt, wo Joseph sich als Ernährer der Völker um den alltäglichen Haushalt Ägyptens kümmert. Obwohl das Majorat des Judentums nicht Joseph überreicht ist, ist er als wirklicher Führer sowohl vom Himmel als von der unterirdischen Welt gesegnet. In dieser Segnung ist das Interesse nun nicht mehr das sich zerfressende, sondern das sich erzeugende. Statt der Spannung des neugierig forschenden Interesses herrscht hier die Entspannung des ruhig besänftigenden Interesses, der Sympathie.